

箱館戦争と青森町の人々

青森にもあった

戊辰戦争の痕跡

市役所から西へ進み、ちょうど柳町通りと交差する地点に、かつて戊辰戦争で亡くなった人々の墓地があり、す



【図①】 戊辰役墓地（○部分 昭和18年「青森市街図」）

【問合せ】
市史編さん室 ☎017-732-5271

ぐ東隣（現在の市役所）には県立病院がありました。この墓地を市史編さん室にある地図でたどってみたところ、昭和13年（1938）以降の地図には描かれているのですが【図①】、それ以前の地図には描かれておらず、昭和2年（1927）の地図には県立病院のみ、大正10年（1921）は呉服店明治44年（1911）は師範学校がその地に描かれています。

ご存知のように、戊辰戦争といえど、今から145年ほど前に起きた明治新政府軍（官軍）と、旧徳川幕府軍とが争った内戦です。県内では、野辺地戦争がこの内戦のひとつとして知られています。また、この戦争の最後の舞台となった、箱館戦争（五稜郭の戦い）は、テレビドラマにもなっているのですが、榎本武揚や土方歳三などは、格好のいい俳優さんでイメージされているかともいってしまうのではないのでしょうか。

その戊辰戦争での戦没者のお墓が、青森市内にもあったのです。そして、

箱館戦争の当時、青森の町は戦場にこそなりませんが、少なからず町中がこの戦争に巻き込まれていたのです。今回は、箱館戦争と青森についてご紹介することにいたします。

市中が官軍兵士であふれる

あふれる

明治元年（1868）10月26日、箱館の五稜郭が、榎本武揚率いる旧徳川幕府軍に攻略されます。その前日の25日、新政府軍のリーダーともいえるべき箱館総督の清水谷公考【写真①】が、兵士80人とともに箱館から青森へ逃げてきました。これは青森町の人々には予期しない出来事で、市中は大騒動になりました。しかも、騒ぎはこれで収まらず、翌日にはさらに1千人ほどの敗走する兵士が青森にやってきたのです。宿として使えそうな家には無理にでも宿を頼み、お寺も宿所となり、各寺では市中から夜具・お膳などを借り上げています。この日は、正覚寺に680人収容したと記録されています。また、兵士のなかには負傷した者もいたので、



【写真①】 清水谷公考（北海道大学附属図書館蔵）

蓮華寺【写真②】を仮病院とし、そこに収容しました。

加えて、新政府は五稜郭奪還を目指して援軍を派遣します。彼等もまた青森町とその周辺に駐屯し、明治元年12月の段階で、青森町には9千500人以上の兵士が駐留することになりました。当時の青森町は人口が1万人を少し超える程度だったので、人口と同じ位の人数の兵士たちを抱え込むことになりました。これは、青森の収容力を大きく超えることになり、宿を提供した家では疲労と当惑の色が隠せないようでした。

一方、青森に駐屯の兵士たちは、ここで冬を越すことになりましたが、布団は3人に1枚の割り当てしかなかったといえます。



【写真②】仮病院となった蓮華寺

箱館からの

軍艦入港に驚く

官軍兵士があふれる青森町に、明治元年11月7日、突然箱館から旧幕府方の軍艦2隻が青森湊に入港しました。入港の目的は、新政府への「願書（陳情書）」を渡すことであつたようですが、市中にこのことが伝わると、艦砲射撃で焼き討ちにされるといふ噂が立ち、人々は家財道具を近所の村へ運び出すなど大騒動になりました。

翌日には、またいつ旧幕府方の軍艦が入港し、発砲するかも分からないといふことになり、浜町の海岸3か所に^{だいば}台場（海岸付近に設置された砲台）を設置することになりました。このうちのひとつが町奉行所の海手の海岸に置かれました。当時の町奉行所は、現在のワシントンホテルの海手側の駐車場

の辺りです。

軍艦到着を

待ちわびる官軍兵士

青森で冬を越した官軍の兵士たちは、その後もしばらくここで時を過ごし、す。というのは、箱館を奪還するのに欠かせない軍艦がなかなか到着しなかつたからです。もうすぐ来るだろうといふ噂は流れるものの、なかなか実現せず、兵士たちの志気は下がつていきました。

ようやく軍艦7隻が到着したのは、明治2年（1869）3月26日のことです。そして、4月6日から兵士を乗せた軍艦がいよいよ箱館へ向かうことになりました。出発に際しては、近在の村々からも見物のための人々が集まり、この時の様子は「誠に未聞の賑わい」と当時の記録に記されています。また、これまで兵士の宿を引き受けていた家々では、ようやく解放されたと喜びました。ただ、戦争中は青森が、兵士や物資輸送の基地となつたため、市中の緊張はまだしばらく続くこととなります。

青森町にとっての

終戦

箱館では、5月18日に旧幕府軍が降伏し、戦争は終結します。しかし、青森には、4月の末頃から負傷した兵士

たちが送られてきました。彼等は塩町の「遊女屋」（遊郭）に収容されましたが、ここが一杯になるとお寺にも収容され、治療を受けました。こうした負傷兵は、6月26日まで青森に逗留しました。

さらに、戦争が終わつたことで、今度は旧幕府方の降伏兵士が青森にやつて来ました。もちろん、数百人単位の人数です。負傷兵が去つた後は、お寺に収容しましたが、入りきれない者たちについては、やはり市中で引き受けることになりました。

このように、町ぐるみでさまざまな負担を求められながら、箱館戦争の遂行を支えていたのでした。

そして、ようやく10月25日に、降伏人に乗せた蒸気船が青森湊を出帆しました。箱館から清水谷公考が青森に敗走したのは一年前の同じく10月25日です。これで行く、町民を巻き込んだ、青森にとつての箱館戦争も終わりを迎えることになりました。戦争中は、お正月の行事なども禁止されていましたが、町では夜宮なども執り行われるようになり、徐々に賑わいを取り戻していきました。

数々の

「珍敷（めづらしき）」もの

戦争のさなかではあるものの、青森には蒸気船が入港したり、また、箱館

から避難してきた外国人がやって来るなど、青森の人々にとつて物珍しいものが市中にあふれていたようです。特に、外国人の女性や子どもに対しては、多くの見物人が集まつたともいいます。海上に浮かぶイギリス船の中には、ヴィクトリア女王の誕生会が催され、弘前藩主などが招待されています。また、蒸気船見たさで、現在の平川市の方から青森までやってきた一行の記録もあります。しかもこのうちの一人は、どうしても蒸気船に乗りたくて、石炭積み替えのための船に乗り込んで、ついに蒸気船への乗船を果たします。そして、船内を見物して「其美麗なる事、言語に絶たり」とその感想をもらっています。

当時は、問者（スパイ）などが青森に入つてこないよう番所を設置するなどして警戒をしていましたが、あちこちから青森の珍しいものを見物しようと人々がやって来ていたようです。

なお、青森の人々はこうした「珍敷（めづらしき）」ものにも喜々とする一方で、ここから「時勢ノ変動」もしつかりと感じ取っていたようです。

こうした幕末・維新期の青森町の様子については、昨春発刊の『新青森市史』通史編第二巻第四章「幕末・維新期の青森」に詳しく書かれています。

ぜひご一読ください。

（市史編さん室事務長 工藤大輔）